

12.2 反プルサーマル行動の日 要請書

貴職の責任として 住民と未来の人々の命を守るため 玄海原発を止めよ

2021年12月2日

佐賀県知事 山口祥義 様

あしたの命を考える会／今を生きる会／風ふくおかの会／玄海原発反対からつ事務所
原発知っちよる会／原発を考える鳥栖の会／さよなら玄海原発の会・久留米
戦争と原発のない社会をめざす福岡市民の会／脱原発電力労働者九州連絡会議／たんぼぼとりで
怒髪天を衝く会／東区から玄海原発の廃炉を考える会／福岡で福島を考える会
プルサーマルと佐賀県の100年を考える会／玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会

2009年12月2日、全国初、MOX燃料を燃やすプルサーマルの運転が、九州電力玄海原発三号機で始まった。

プルサーマルは使用済みウラン燃料から取り出したプルトニウムと、燃えにくいウランを混ぜたMOX燃料を原子炉で燃やす。ウラン用の軽水炉でこの燃料を使うために設計変更や改造などされたこともなく、3号機118万kWキロワット級の原子炉でのプルサーマルは世界初で危険極まりない。しかも玄海プルサーマル用MOX燃料のプルトニウム濃度は世界の実績よりさらに高く、安全性が十分検証されていない。MOX燃料を使用することで、通常のウラン燃料と比べて、原子炉のブレーキの役割を果たす制御棒の利きが悪くなったり、燃料破損の可能性が高くなるなどの専門家の指摘に対し、明快な回答がされたこともない。また、プルサーマルを実施すると、燃えないプルトニウムや、処理の困難な放射性物質を大量に生み出す。核燃料サイクルが破綻した中、利用も廃棄もできない物質の管理という新たな難問をもたらす。

使用済みMOX燃料は六ヶ所再処理工場では処理できないため運ぶことはできず、第二再処理工場も「もんじゅ」が廃炉となり政府の計画から消えている。使用済みMOX燃料は、100年経っても玄海のプールで冷却継続という危険に晒されていく。もうこれ以上、玄海原発の稼働によって核のゴミを増やしてはならない。

東京電力福島第一原発事故から今年3月で10年が経過したが、復興という言葉は空虚に流れ、無人になった市町が真に蘇ることはあり得ないと避難者の方々も口々に語っている。この事故より毎年、原子力防災の住民避難訓練が原発より30キロ圏内に位置する市町では繰り返されてきた。しかし、その避難計画の実態について本年3月18日、茨城県の「東海第二原発」運転差止裁判で住民側が勝訴、「実効性ある避難計画や防災体制が整えられておらず、人格権侵害の具体的危険がある」という判断が下された。このような状況は、日本全国の原発に、玄海原発においても同様であり、自然災害と原発事故、さらにコロナウイルス等の感染症パンデミックが重なれば、放射能の重い被ばくからもう逃れることができないことに住民たちは気付き恐怖感を覚えている。

玄海原発では、2019年からケーブル火災などが相次ぎ、今年8月にも空調機で焦げ跡が発見され、11月15日にその報告書を提出したかと思えば、翌16日に工事現場でケーブル焼損事故を起こした。短期間に火災を繰り返したことで九電は、佐賀県と玄海町に対し謝罪したが、11月30日には3号機の放射性ヨウ素漏れ事故を起こした。九電はヨウ素漏れの原因究明のために運転停止することもなく、「規定値内なので問題なく、監視を続ける」というだけだ。プルサーマル開始後1年で起きた2010年のヨウ素漏れ事故の原因究明も何も出来ていないではないのか。安全よりも企業利益を優先するこのような態度を佐賀県は安易に容認してはならない。佐賀県知事の最大の責任は、住民の命と暮らしと財産を守ることである。以下、わたしたちは、この「反プルサーマル行動の日」に強く要求する。

一、使用済み MOX 燃料など核のゴミを玄海町にこれ以上増やしてはならない。

貴職は住民のくらしを守る立場だからこそ、プルサーマル炉の玄海原発3号機ならびに4号機の同意を取り消し、直ちに停止するように、国と九州電力に求めること。